

たかさね史話 34

く高砂神社での相撲興行Ⅰく

江戸時代、相撲は姫路の殿 亡くなった清水町の陣幕良助様から庶民まで広く楽しまれたスポーツだった。高砂神社の記録にある境内内外での相撲興行の許可を姫路藩に願う願書の写によれば、江戸で大相撲が興隆した十九世紀になると同社でも相撲が盛んに行われている。

寛政十年（一七九八）四月の最古の願書は、高砂の清水町に住む名取川了助こと油屋三右衛門の門弟が、尉姥社の祭の折に稽古相撲を奉納することを願ったものである。名取川は相撲興行を何度か願っているが、ある願書では「角力^{すもう}渡世」と書かれており、相撲を商売としていた。幕末に書かれた地誌『高砂雑誌』には、相撲取として初名を名取川とい

文化期（一八〇四〜一八）には高砂神社での相撲興行は神社祭事から独立して正月の取始相撲が中心となり、天保期には大坂の大相撲興行時期に近い秋の晴天日に一〜二日行うようになった。興行人も多くなり、高砂での相撲の隆盛がうかがわれるが、この時期の相撲事情については次回あらためて書きたいと思う。

（高砂市史編さん専門委員 中川すがね）

いい天保十四年（一八四三）に

（高砂市史編さん専門委員

中川すがね）